

理学的検査は、病態の把握、鑑別診断、予後予測などに有用である。

## 12. 更年期外来受診者の精神症状について

早川 達郎, 亀井雄一, 富山三雄  
浦田重治郎

(国立精神・神経センター国府台)

赤松達也, 木村武彦

(同・産婦人科)

広瀬一浩, 内山 真, 白川修一郎

大川匡子 (同・精神保健研究所)

当院更年期外来を受診し、精神科医が面接した39例について、更年期指数高低2得点群に分け比較し、モーゼレイ性格検査神経症的傾向尺度(MPIN)についても同様に比較した。更年期指数高得点群では抑うつ気分、喜び喪失、集中力欠如等が有意に高く、更年期障害特有の精神症状と推察した。MPIN 高得点群では上記に加え、不安、焦燥感が有意に高く、更年期のホルモン欠落に性格、心理的要因が絡みあって出現する症状と推察した。

## 13. 左前大脳動脈閉塞による超皮質性運動性失語

寺本 靖, 中居龍平, 坪井義夫

山中 泉, 小島重幸

(松戸市立・神経内科)

3例の左前大脳動脈閉塞による超皮質性運動性失語を経験した。その症候は、急性期の発語量の低下、慢性期の自発語の低下、良好な復唱・理解であり、画像所見から、共通の病巣は左補足運動野であった。標準失語症検査では、語の列挙が不良で、呼称は良好、復唱・理解は良好であることが確かめられた。左前大脳動脈閉塞による超皮質性運動性失語の特徴は、言語開始機構の障害で、これは補足運動野と密接な関わりがあると思われた。

## 14. 精神神経症状をともなった Marfan 症候群の1例

安田聖子, 柳橋雅彦 (千大)

秋草文四郎 (同・二病理)

精神神経症状を呈した Marfan 症候群の女性例を報告した。当初、精神分裂病を疑われたが、症状経過が典型的でないこと、脳波異常、大脳萎縮、境界知能などの身体的基盤があることより、本症候群の部分症状と考えた。多くの報告例から中枢神経系の症状はその発生学的起源である外胚葉系の脆弱な素因による可能性がある

と考えられた。このような視点からの本症候群の精神神経症状の再検討及び生理学的要因への着目の必要性が示唆された。

## 15. Parkinson 病についての新修正法, wisconsin Card Sorting Test 聴覚版による神経心理学的検討

池田智昭, 児玉和宏, 佐藤甫夫

(千大)

山田達夫 (同・神経内科)

旭 俊臣, 根本芳枝

(旭神経内科病院)

痴呆がなく、年齢に有意差のない Parkinson 病患者35名(PD 群)と正常者29名に、新修正法 Wisconsin Card Sorting Test (視覚版)と視覚版を元に我々が作成した‘聴覚版’を施行し、認知障害を比較検討した。両検査で概念の変換や維持の障害など、‘聴覚版’で言語による行為(言語)の制御障害が有意に PD 群で認められた。視覚と聴覚の結果の相違から、記憶の保持・検索過程などの異常が視覚よりも聴覚刺激で顕著になると考えられた。

## 16. 成人型シトルリン血症の1例

花澤 寿, 林 竜介, 池田政俊

長谷川雅彦, 日野俊明, 富山學人

竹内 龍雄 (帝京大・市原)

当初有機溶剤吸引によるせん妄状態を疑われた成人型シトルリン血症の1例を提示した。検査上高アンモニア血症・高シトルリン血症(993.1nmol/l)・肝細胞内 Argininosuccinate synthetase 活性の著明な低値(正常の4%)を認めた。症候的には、特異な偏食傾向(豆類・チーズ・ゆで卵等)と夜間に増悪し食事内容との関連が強い意識障害発作の反復がみられた。高アンモニア血症に対し安息香酸ナトリウムの有効性が認められた。

## 17. 随意運動時過動を呈した有機溶剤依存症の1例

石毛 稔, 村上敦浩, 山内直人

野田慎吾, 岡田真一 (千大)

中島雅士 (同・神経内科)

14歳からボンドおよびシンナーを約6年間吸引し、中止した1ヵ月後に随意運動時過動を呈した20歳女性を報告した。